

# 園長通信

イメージキャラクター  
ふたぶう

高槻双葉幼稚園50周年を記念  
して誕生しました。  
幼稚園で子どもたちを見守って  
れています！



2024.10.01

園長 岡部 祐輝

## 運動会の種目・取り組みはどう決めている？

今年は9月に入っても連日猛暑で、熱中症アラートが出ている日も多くありました。前回の通信でもお伝えした通り、熱中症のアラートを見ながら屋外での活動実施有無は検討していましたが、「今日はこんな活動をしようかな」ということができない日も多くありました。しかし、子どもたちは連日暑い中でも、その日に体を動かせる場所で元気よく遊び、過ごしていました。

9月に入り、園では日々の遊びと同時に、10月に開催される「年少運動参観」「年長・年中運動会」の取り組みを進めてきました。学校教育でよくみられる「運動会」。皆さんはどのようなイメージをお持ちでしょうか。「綱引き」、「玉入れ」、「リレー」など、幼いころに経験された種目がイメージされる方が多いかなと想像します。当園でも運動会でよくみられる種目に取り組み、当日その姿を見ていただいています。私たちはこの「運動会」へのアプローチ（取り組む方法）を年度に応じて見直して取り組んでいます。

幼児教育では、「子どもの姿」（興味・関心など）を出発点に「やってみたい」、「チャレンジしてみたい」気持ちが高いものや高めたものをもとに、保育者が子どもたちに「ねらい」や「ねがい」を持ったうえで、活動や取り組みを考えるということが、今の幼稚園教育要領などに示されています。なので、「運動会」を例に挙げると、「綱引きをやりま

**す」から先に決めて、そこに「子どもの姿」や「保育者のねらいやねがい」を後付けすることではない**といえます。

当園でもこのような保育計画・活動計画を考える際にその順序については考慮をしたうえで、また、子どもにとって全く意味をなさない、興味すら感じないという活動とならないよう、「面白い」を高める工夫を行ったうえで、種目や取り組む活動についても設定をしています。この流れで考えると、**年度により「実施する種目が変わった」というようなこともあり得る**ということになります。



## 「運動会」で育つこと

運動会の取り組み方や時間の使い方も園によって様々です。しかし、ここで「何度も練習」、「特訓」などのモードで私たち保育者が取り組むと、おのずとそれは「させる」、「やらせる」、「大人の都合（出来栄/完成度など）」となってしまいます。

時に、「いやなことにも向き合う、我慢する経験をするのが運動会など、行事の中での経験、育ちで大事なのではないか」という主張をなさる方も出います。幼児教育は、子どもの発達のだん筋、違いが様々にある年代の子どもたちがいる中で行っていく教育です。その子どもたちに、一律同じ課題を与え、同じようにできることを求めることはそもそも、規定されていません。（幼児教育では到達目標を設定して保育を計画する性質のものではありません）また、発達的にも、特に幼児期に「受け身の我慢」（なぜ我慢しないといけないかわからない理不尽なもの）ではなく、「前向きな我慢」（何かをかなえるために今頑張ろうとする/理不尽な我慢ではないなど）を経験することが、自己制御、自己調整の能力をはぐくむ観点でも重要であることは、研究エビデンスからも分かってきています。

また「大人の都合」を持ち込むと、何が起るか。「子どもを焦らす」、「なんでできないの?と言ってしまう」、「発達や興味関心などに応じようとせず無理を強いる」というようなことが起こり、これが過度になるといわゆる「不適切保育」になります。そして何より子どもたちが「自分ごと」、「自分で決めた」という満足感を得ずに行事が終わってしまいます。

以上のようなことは「育つこと」ではなく、「子どもたちの育ちを蝕むもの」と考えます。

では、「運動会」では何が育まれるのでしょうか。



上記写真は、子どもたちが保育の中で調べる時に使用できるタブレットを保育者と一緒に見ている場面です。（年長）

運動会でリレーに取り組んでいます。何度か取り組む中で「バトンを渡すことを工夫するとよいのではないか」ということに気づき、その観点でバトンを渡す動画を調べ、見ているという場面です。そしてそのあとすぐに調べたことをもとに、取り組みをしています。



このように「速くなりたい」などかなえない、そうなりたい思いに向かい、自分たちで納得する方法で試し、形にし、それらを発揮しようとするプロセスの中で、「問いに対して最適な答えを見出そうとする」ことや、「わからないことは調べたり友達と協働して取り組む」ことの良さを学びます。そして、取り組んだ後に、「課題」だけではなく、「よかったこと」、「がんばったこと」など肯定的な振り返りを通して、「自分を自分で肯定的に評価する」育ちにつながるといわれています。（セルフ・コンパッション）

学年によって、発達や子どもの姿、ねらいなどは異なりますので、上記の育ちがどの学年でも一律見られますということではありません。しかし、どの学年でもいえることは、「運動会」において、当日の成果を追求するのではなく、それまでの取り組みの過程を豊かにしたり、立ち止まって考えたり（例：大人がわかっている解決法を先回りして伝えるのではなく、あえて子どもたちが考えるなど）することに時間をかけ、**自分事として引き寄せた「運動会」**となることのほうが、よほど子どもたちは積極的に取り組み、そして喜び、運動会が終わってもその経験や育ちは止まることなくつながっていきます。

保護者の皆様には取り組む過程をお便り（ドキュメンテーション）や、Instagramなどでぜひ注目いただけますと幸いです。